



三養雜記

四

1曾5  
120  
4





門 120  
號 4  
卷

三養雜記卷四目錄

頼朝卿放たまふ鶴

かんくろ

鶯替の神事

好文木

瓢の種類

七かんくろ毛

羊羹求肥

太く神樂

鞘畫

書を傳ふ雁

鳥獸の語

十六島海苔

瓢箪の字義

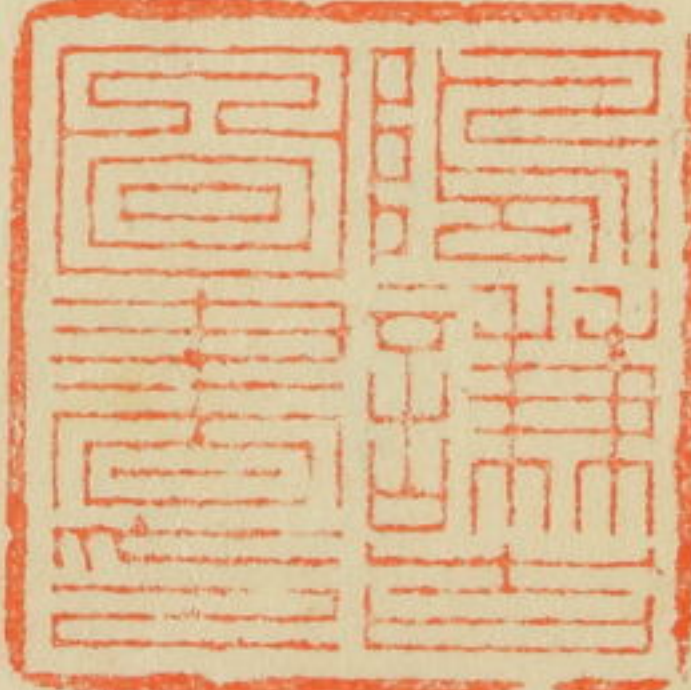
蕪絲

桃栗三年柿八年

月待日待代待

一まむしよ入道

舌池の句







琴唄あらし弓の考

雷公連鼓を肩ふ乃圖

木乃伊

天復の古鐘

鞞鞞國

七福神

心猿

行基菩薩の遺誠

だせし地蔵

守宮の辨

異骨

多賀城碑の里數

銅鐸

庚申の三猿

西遊記

三養雜記卷四

頼朝卿放たまふ鶴

鎌倉由比の濱に頼朝卿の鶴を放たまふと世子あまぬ

くいの傳ふと吾妻鏡をいじめ正き記録子うつく見え

たりのれ予り管見子て本朝食鑑子源二品之放

鶴亦暨五六百年來往于駿遠之田澤偶觀之者謂

翼間有金札記年號支干云ま南向亭茶話丸山の

條子古老比物語小元禄年中この所比田畑へ鶴飛きた

り數日留り居やれと度ありそ此鶴の足子金の小札

あり頼朝卿の被放し鶴のよりふれ此由急所の民子









あふひの多社人あやしくしてあれをえりて鳥線を巻きて、  
あまを捕つて、あまを飛去とれ、その綿解て見れば不  
思議の札文字のすまうて、讀ハ願ハ須知九子孫義子あり  
て家越起つて、あまを人子於て、我ハ神人となりて是を  
守護す、一、文治五八景次とあり、又片羽の方、故  
郷忘れ難く、命ハ義小依て、輕一文字松葉子つ  
る心底盡し難く、景次文治五八の五印とあり、心を極字小  
彫付てあり、稱宜不思議子おもひ攝州の多田院敷  
子達して仰子、但て須知小太郎景元へ達す、小太郎三  
の木札子あり、つけたる心を至極子達し、大子よりこびる

是を秘して、判官殿ハ未世より、景次も生てあ  
る、と獨りして、稱宜おもひ、是を景次高館敷子、取  
後の時中も云て、い、弓取れ道、う、こ、そ、そ、涙とあ、ん、  
景元、九、雁金の鳥、と、ひ、れ、び、う、う、う、う、う、う、  
水子、う、た、て、て、あ、ま、と、あ、ま、依、て、そ、れ、あ、ま、を、景元、乞、受、て、  
あ、ま、二、鳥、の、う、う、強、く、し、て、餘、日、と、過、す、お、ち、て、う、う、う、う、  
の、綿、つ、ま、て、不、結、ひ、物、と、見、れ、ば、お、ち、た、る、こ、も、う、れ、は、五、印、と、あ  
る、時、ハ、數、ハ、五、風、あ、て、う、れ、て、お、ち、て、け、う、又、ハ、別、の、鳥、み、も、付、て、何  
も、う、神、變、奇、持、と、感、涙、を、あ、ら、う、又、鳥、ハ、よ、う、物、ハ、あ、り、人  
ハ、却、て、道、を、あ、ら、う、と、い、え、う、う、雁、の、玉、章、を、く、敬、し











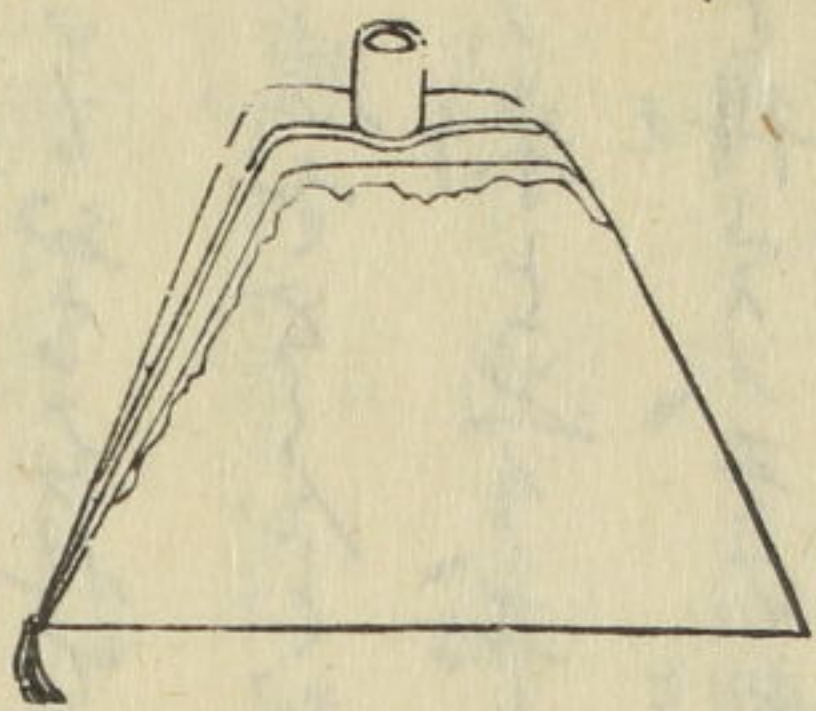
あやと孔雀樓筆記子又えり、この説が子さきとて抄りし  
ハ今狩人の鹿もあれ雉もあれ、これ鳴音を笛ひてまゐるハ  
同じ葦と抄りひてありきさきゆめのとて、ちやくつれ、草子女  
のちやくあだまて作まる笛子ハ秋の鹿うあひあつとつハ  
傳つゆるとり、この女れあだまて造れる笛の事いふ故  
事うありらん、たゞあきき誇りひつゝ、たゞとてそ抄りて或  
云三河國安部山の人都子登り名ある遊女のたゝる履を  
とりて歸り、笛子造りて阿部山の中子入り是を吹子鹿れ  
多くよきと常のあだまて作る笛よりちまさらりてあま  
里といふ説もあれと、このつれ、草れ文子よりちまうけたるこ

とみやもおもちれておろつあ、そびらあれちより  
狩人の鹿をそんとおろし時ハ笛子鹿の鳴音をまあせとき  
ハ自より來ととり、予ろろ上総國あるあ人子あつてへく  
鹿笛を得り、その製鹿角ちも又、木子てを造り鹿の腹  
ありの皮をちりて吹えと抄り時ハ水子浸し張たる皮を  
潤し左右此手の指ち皮をこきつ吹バ、あが鹿鳴と  
あれと真子逼ち、その形ハ、くの如く古代の馬れ焼  
印子鹿笛といふ、この形あり吾邦の、あ唐山印度ちも  
笛ち鹿をちりてあり、太平廣記子江陵松滋技江  
村射鹿者率以陶阿鳥骨為管以鹿心上脂膜作簧

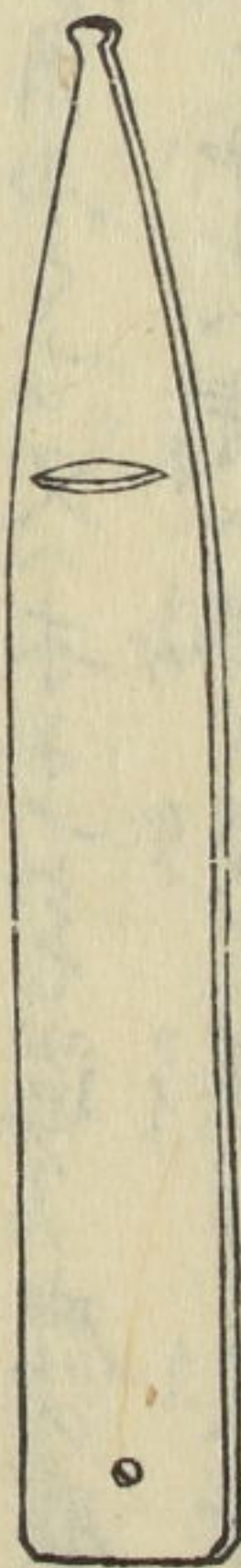
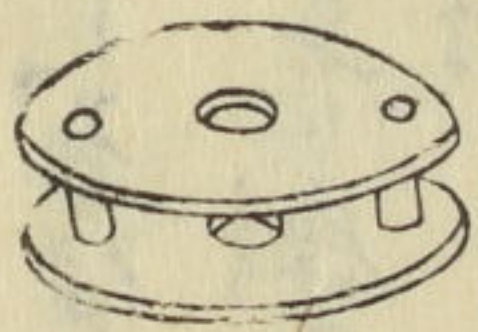


吹作庶聲有大號小號之異或作縹庶聲則縹庶集  
 蓋為壯聲所謂人得教矢而注之とありまゝ心地觀  
 經にも心如野庶逐假聲かどをえり鳥をも笛少てよ  
 すまゝと雀笛ハ常子目むしてあつらゝるる越後にて雉  
 笛あり

庶笛



雉笛



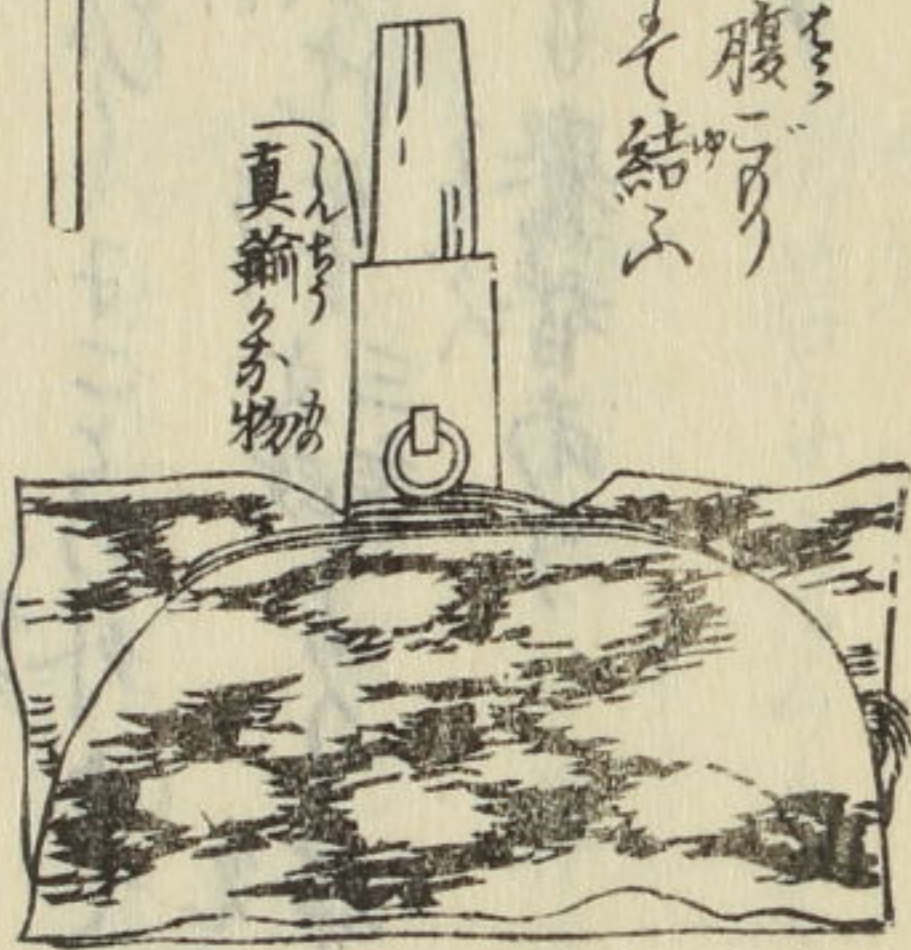
右三品づいも  
大サ圖の如し

四六

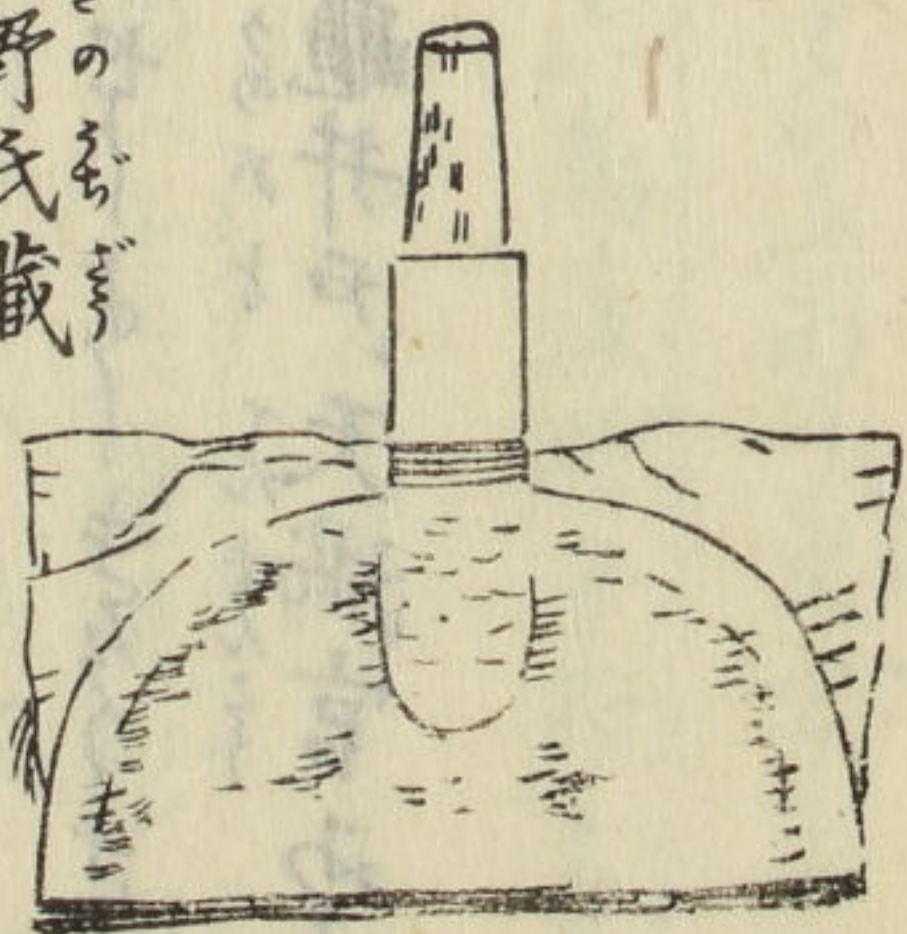
蕨の角ゆき造り庶の腹の  
 の皮をたくりのめん縁を結ぶ

真鍮にて造りくくの  
 如きまのそひてあり

表



裏



荻野氏藏

鷹替の神事

筑紫の太宰府にて毎年正月七日の夜酉に刻ころより鷹  
 替に神事あり今ハ世ふあまねくあることあれどもむろハさう  
 とありとある人まれあり貝原益軒の筑前續風土記及び天  
 満宮故實あどふんえこれどくろくろくあるも天  
 記子參詣の老若らちのどひ来て木をくり作りたる鷹の鳥

四六



と調へ相たぐひ子袖子とらうとそえんとと訂して雙方より  
取らうとせしめりといふ予ら此地の鷺をわらわせとらうとせしめり  
と近ごろ文政二年大坂の天満天神より宰府よりあつひく  
あの神事をたゞめて執行せしとき大坂あての名乗り唄子  
こころづくと此神さんうそをまて子替さんすらんま  
そぐへおとくま

このふ小島をうそひり子ことの外りてをぬせしよりきまらさて  
江戸あてもその次北年文政より本庄龜井戸天満宮あり  
毎年正月廿五日子鷺替あり

十六島のう

出雲國よりつづき海苔子ウツク九ヒリといふあり文字子く  
ハ十六島と書たり讀耕齋文集子十六島藻贈金節書一  
篇あり名義の釋もあらず西ほどあつては藻すす懐  
橋談子十六島を俗子うらひ島といふ十六権現影向の  
地ありとて水底子氣味あつてき海藻あり三瓶山子雪  
降てその浦へげらるる時ふあれ海藻を採まばありとい  
語る世これをつらひのうといふ古記子北浦に雜物を注  
すととぞうらひといふのうれ此郡の海あり所雜物  
ハ海藻海松紫菜類海草とありハ紫菜此類あり予按ふ  
この水底に海苔をとりて露らちうひり日するおけハ



うらやみのつと云々をたまたむ聲子てうらやみのひ十六  
善神島此のつと文字子書てハ言葉あつて故子善神  
と畧して彼俗言のうらやみのつと云々そのあつて文字子よき  
オシたつとものつと云々つとつと人子點頭なつてこれ子  
て名義いあまうらや

好文木

梅を好文木といふとハ軒端梅の謠曲子ありて人の知る  
あども唐土の書子ハたえて又えつとつと好く卧雪日伴録子も  
又えつとつと故事とすつとつと好くつとつとそれ來り  
謠古ハ好文木晋起居注云哀帝讀書則四時隨

之開華故好文木と云あり、東見記子梅云好文  
木故事在晋起居注晋武好文則梅開廢學則梅不  
開云とあり武帝哀帝いづれも是ありや、説部も  
起居注ハよく收められ好文木の事ハ又えつと

瓢箪の字義

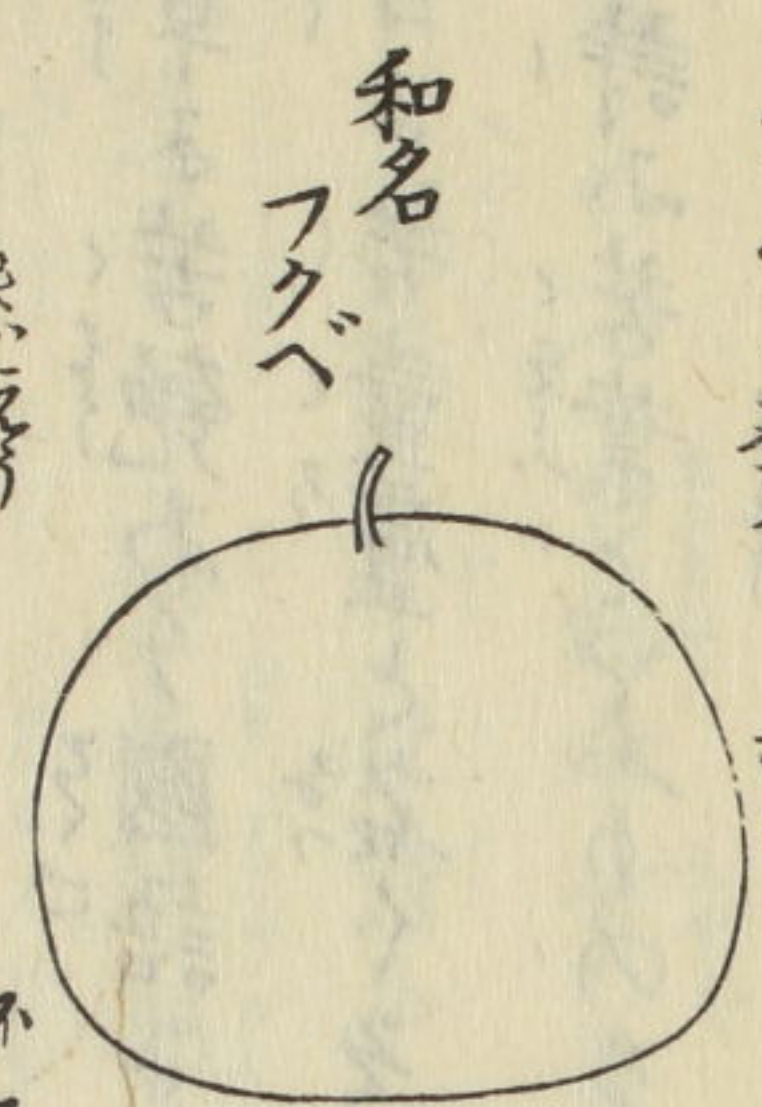
俗子ひさごを瓢箪とつと瓢ハひさごあつてつとあまでもか  
らまごを箪ハ竹のつと籠あつて瓢ハ自別物をり、これハ世ハひ  
さごを瓢箪とよぶハひさごとあり、されどその來りとも亦  
一運歩色葉集子瓢箪の熟字あり室町殿日記子功德水  
を汲瓢箪不入もつとつとつとつと天文のころより已



子<sup>こ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>押<sup>お</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>今<sup>いま</sup>熟<sup>じゆく</sup>字<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>起<sup>おこ</sup>る<sup>る</sup>あり<sup>り</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 橘<sup>たちばな</sup>直<sup>ちよく</sup>幹<sup>かん</sup>乃<sup>の</sup>文<sup>ぶん</sup>小<sup>せう</sup>瓢<sup>ひょう</sup>葦<sup>あし</sup>屢<sup>りゆ</sup>空<sup>くう</sup>艸<sup>そう</sup>滋<sup>し</sup>顏<sup>げん</sup>潤<sup>じゆん</sup>之<sup>之</sup>巷<sup>きやう</sup>藜<sup>れい</sup>藿<sup>くわく</sup>深<sup>しん</sup>鎖<sup>さ</sup>  
 雨<sup>あめ</sup>濕<sup>じつ</sup>原<sup>げん</sup>憲<sup>けん</sup>之<sup>之</sup>樞<sup>しゆ</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>句<sup>く</sup>朗<sup>らう</sup>詠<sup>えい</sup>も<sup>も</sup>載<sup>のり</sup>た<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>八<sup>はつ</sup>人<sup>にん</sup>口<sup>くち</sup>子<sup>こ</sup>膾<sup>かい</sup>炙<sup>し</sup>  
 して<sup>して</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>々<sup>々</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>一<sup>いつ</sup>聯<sup>れん</sup>あり<sup>り</sup>、お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>ふ<sup>ふ</sup>子<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>句<sup>く</sup>此<sup>こゝ</sup>常<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>  
 お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>て<sup>て</sup>瓢<sup>ひょう</sup>葦<sup>あし</sup>を<sup>を</sup>ひ<sup>ひ</sup>き<sup>き</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>名<sup>な</sup>小<sup>せう</sup>熟<sup>じゆく</sup>字<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>す<sup>す</sup>  
 と<sup>と</sup>押<sup>お</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>れ<sup>れ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>、わ<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>瓢<sup>ひょう</sup>葦<sup>あし</sup>一<sup>いつ</sup>葦<sup>あし</sup>食<sup>じき</sup>一<sup>いつ</sup>瓢<sup>ひょう</sup>飲<sup>いん</sup>あり<sup>り</sup>い<sup>い</sup>で<sup>で</sup>る<sup>る</sup>文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>  
 少<sup>せう</sup>く<sup>く</sup>、唐<sup>たう</sup>土<sup>ど</sup>あ<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>ハ<sup>ハ</sup>葦<sup>あし</sup>瓢<sup>ひょう</sup>と<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>え<sup>え</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>、

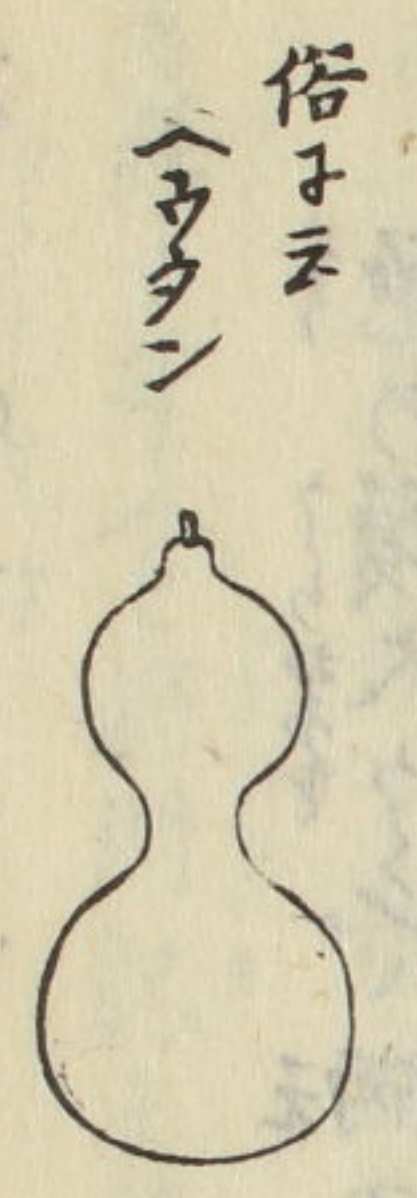
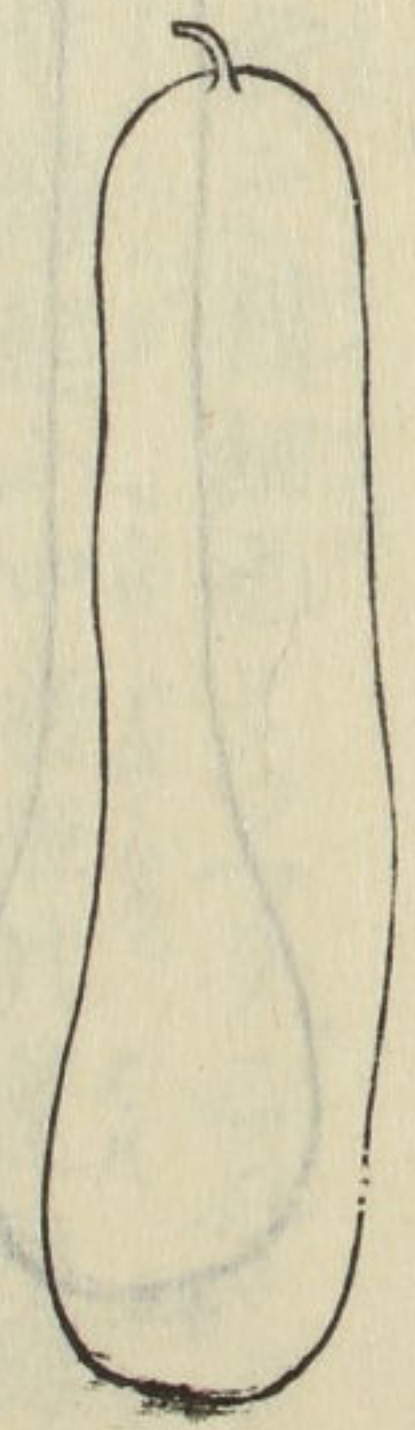
瓢<sup>ひょう</sup>子<sup>こ</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>種<sup>しゆ</sup>類<sup>るい</sup>あり<sup>り</sup>その<sup>その</sup>水<sup>みづ</sup>子<sup>こ</sup>浮<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>泡<sup>あわ</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>漂<sup>たふ</sup>  
 瓢<sup>ひょう</sup>の<sup>の</sup>種<sup>しゆ</sup>類<sup>るい</sup>

冬<sup>ふゆ</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>バ<sup>バ</sup>匏<sup>ほう</sup>と<sup>と</sup>瓢<sup>ひょう</sup>も<sup>も</sup>ソ<sup>ソ</sup>ウ<sup>ウ</sup>

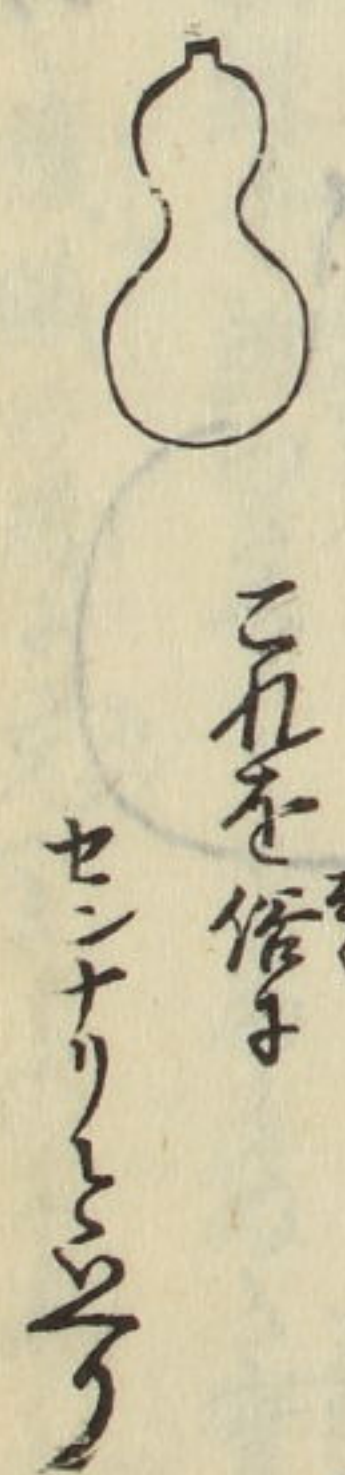


和名<sup>わな</sup> フク<sup>ふく</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
 それ<sup>それ</sup>長<sup>なが</sup>と<sup>と</sup>越<sup>こ</sup>瓜<sup>か</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>首<sup>くび</sup>尾<sup>び</sup>一<sup>いつ</sup>の<sup>の</sup>  
 ぞ<sup>ぞ</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>大<sup>おほ</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>瓢<sup>ひょう</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 和名<sup>わな</sup> ユ<sup>ゆ</sup>フ<sup>ふ</sup>ガ<sup>ガ</sup>ホ<sup>ホ</sup>

小<sup>せう</sup>み<sup>み</sup>く<sup>く</sup>細<sup>さい</sup>腰<sup>えう</sup>の<sup>の</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>蒲<sup>ふ</sup>盧<sup>ろ</sup>  
 瓜<sup>か</sup>、胡<sup>こ</sup>蘆<sup>ろ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>ハ<sup>ハ</sup>非<sup>ひ</sup>れ<sup>れ</sup>



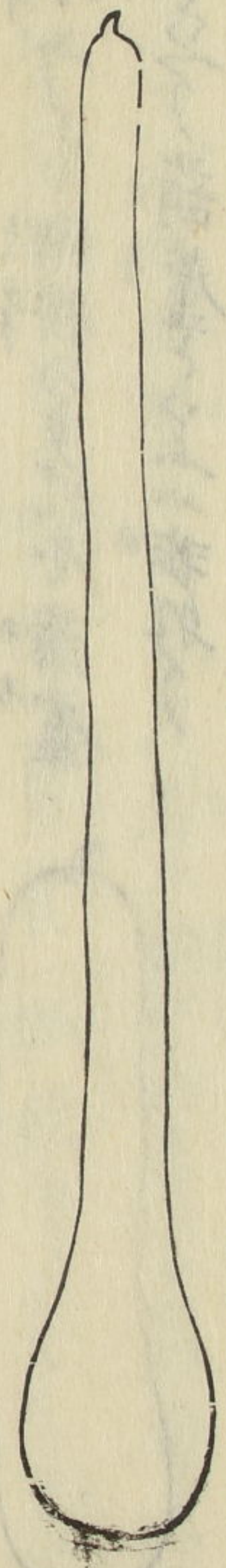
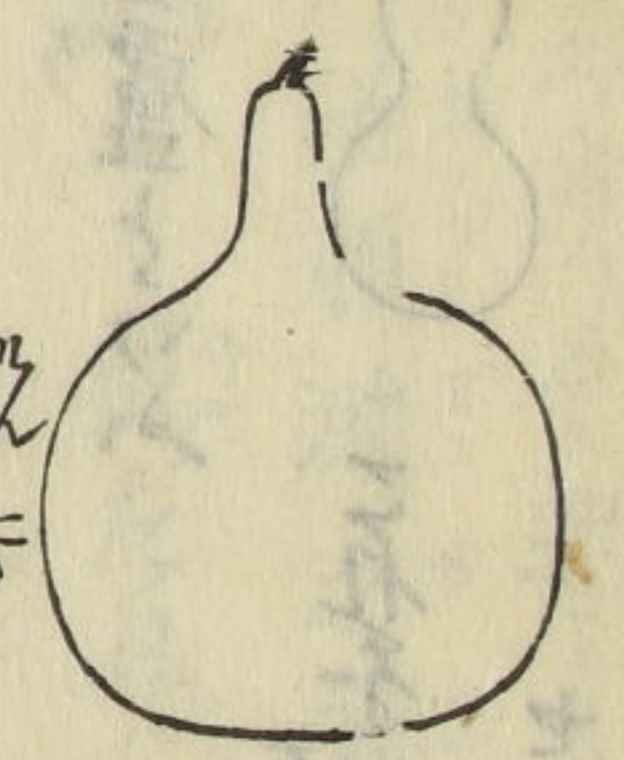
俗<sup>じやく</sup>子<sup>こ</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 同<sup>どう</sup>ゴ<sup>ゴ</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>て<sup>て</sup>至<sup>いた</sup>る<sup>る</sup>て<sup>て</sup>小<sup>せう</sup>み<sup>み</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>  
 藥<sup>やく</sup>壺<sup>こ</sup>盧<sup>ろ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ  
 これ<sup>これ</sup>を<sup>を</sup>俗<sup>じやく</sup>子<sup>こ</sup>  
 セ<sup>セ</sup>ン<sup>ン</sup>ナ<sup>ナ</sup>リ<sup>リ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>





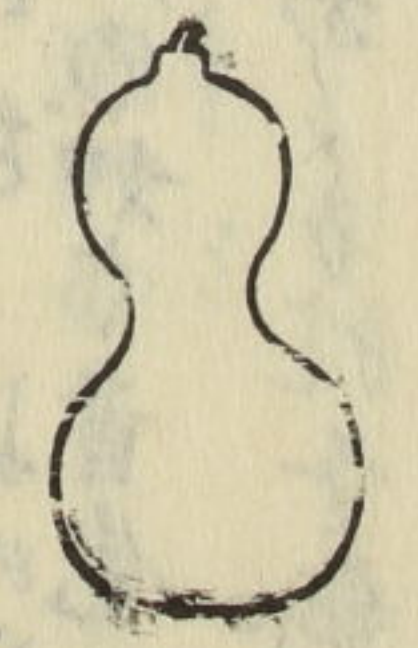
匏かぶ子こ似にて圓まるく大おほきく短た柄へいの  
あらわの壺つぼといふ

匏かぶの頭くちら大おほきく柄へいの長ながきゆれと懸けん匏かぶと云



本草ほんそう子こ苦く匏かぶあり國語こくご子こ苦く匏かぶといふ  
綱目きやうもく子こ苦く壺つぼ盧ろと名なくその味あじ膳ぜんれ如ごと  
一詩いちし小せう苦く葉えふといふゆのこれあり

和名わななニガフクへといふ



藕くろし絲し

藕くろし絲しといふ白しろ絲しを賞あや美みといふ名なあり實じつの蓮れん藕くろしの絲しハ  
あらわの藕くろし絲し北きた字じ杜と詩しといふといふといふ剪せん燈とう新しん話わの採さい蓮れん曲きよく詞し  
子こ張ちやう蓮れん葉えふ之の為ため蓋かき緞とん藕くろし絲し之の為ため衣えといふ注ちゆ小せう藕くろし蓮れん根こん放はう  
翁おきな詩し細さい腰えう美み人にん藕くろし絲し裳しやう言ごん白しろ紵ぢよ之の精せい細さい也なりといふこれこれこよ  
あらわの紗しや小せう吾ご邦ぱう大たい和わの當たい麻ま寺じ綠りよく起き小せう中ちゆう將しやう姬ぎれ蓮れんの絲し  
めて曼まん茶ぢや羅らを織おりたといふといふを世よにいはますとの蓮れんありといふ  
了りやく絲しといふを將しやう門もん記き子こ蓮れん系けい結けつ十じゆ善ぜん之の蔓まんまと運うん步ぷ色しき葉えふ集しゆ  
子こ藕くろし絲し架か紗しやといふあらわの藕くろし絲しを託たくつとつとつとあらわの實じつの  
藕くろし絲しハ水みづ氣き乾かんハ粉こな碎さいといふて機はたか織おりの用もち子こ克くきりの子こあらわの



七あんがそく毛

本朝國語子伊豆國箱根權現の什物此中小悉難が揃毛ありこれ何れのいふをそく毛と云ふ又下総國豊田郡石下村東弘寺此什物の中も七難の揃毛といふれありいそ五色ありて長四丈有餘いそ何物の毛あることを云ふ相傳江州竹生島信州戸隠山あもまゝあるありて什物といふ往古異婦あり七難と名くその人九陰毛ぬり及び塵塚物語子竹生島七難の毛を載すと云ふなりむろハ長物のたといふと引いていひつゝと云ふと云ふ尤草紙の長をのゝとあつゝあつゝ七あんがそく毛とあり物産家子ハ山婆毛といふもの

あつゝとそその實ハ子ぞや扶桑畧記子治安三年入道前大相國詣紀伊國云御本尊寺開寶倉令覽中有此和子陰毛注子宛如蔓不知寸尺とありこの毛もりの七難がそく毛此類あつゝ

桃栗三年柿八年

桃栗三年柿八年抽ハ九年子ありつゝといふはかき果樹を殖の決あり為憲の口遊子桃三栗四柑六橘七抽八謂之菓子頌令按桃樹栽後三年結子他准之可知とあり、口遊といふ書ハ天禄元年の自序あまハその來とありといふが、埤雅子桃三季四梅子十二桃生三



歳放華果早於梅季サイゴハナクワヤレと云うまゝダイリヨリ曲洧舊聞キョウキョウキョウ小毛菓子  
易生者莫如桃ヤキシヤムモラナレ而結實遲者莫如橘スグミヲオソキモノナレ諺云頭有二毛  
好種桃立踰膝好種橘コトクニモスエトウニエトウヨレケルニキクハカシクモバ言桃可待橘不可待レニツキンスガルフヘララツとあり  
和漢同輟コトクニと云う

羊羹 求肥

執苑日涉子羊肝糕以紅豆白糖グツクニツクシ成劑牛皮糖以糯  
粉糖酒為餅フンクワコメニスベイトと云う菓子ヤウケンの羊羹天求肥ハ羊肝牛皮と  
書こそ正字セウトあれ羊の肝牛皮子似キモウラたるよりわと負オヒせ  
名あべぐれども吾邦の俗獸肉をハ不潔フケツのゆれ子地チの  
由ユ系ケイもやくよりよき文字不書改フキマヒるゆゑとあり

羊羹の名より百合羹ヤウケンやあり羹ケンかゝる名ナのいでイデきくは轉テン  
訛シとあり求肥モウヒもつねハ求肥モウヒ餠ヒョウと云うを信濃シノノありて  
ハ求肥餅モウヒヒョウと云うそハ遠國エンクニにてハ所トコロよりて餠屋ヒョウヤと竹細工タケコシする  
者モノハ市町イチマチ子居コイしめ尻宿シラヤとられ子住コジマしむおきて掟おきてありしより  
餠ヒョウと云ふ名をいきて求肥餅モウヒヒョウといふと云うこれ子つきてチサヒ  
出イデてハ松風マツフエと云ふ菓子コシハサヒてハ罌粟ケイリと云うチハ何ナニもあき  
とてトテ松風マツフエと云ふ菓子コシハサヒてハ罌粟ケイリと云うチハ何ナニもあき  
風流フウリウあり名ありナさきをサヒてハ罌粟ケイリと云うチハ何ナニもあき  
名ナつけたるハハ田舎イナおらチハ田舎イナめきてその  
製セイ此コノ質シツ朴ハク好コトのチ名ナハ鄙ヒノカたるをチて風流フウリウハせチハ社シャ











大般若經だいげんぎやうの札しやくといふものハあれ巻數まきかずのむらうむらう、その  
札しやくがたゞとまきハあゝねど巻數まきかずをいへたるもれゆゑそれや  
うて尊信そんしんするもあり、この巻數まきかずは倣て千度一百度の抜ぬきを  
とて幣串へいぐしを祭主さいしゆへ配くわとてその幣へいをたれう、いやくとて  
か、

（まむし）よ入道しよだう

奇跡考きせきかう子こ、うらへの戯たがひ子こゑぐゑぐ（まむし）よ入道しよだううらや、山の井やまのゐ子こ  
望月もちつきれうげとゑ子こよく似にたる井ゐとやひあをせて、  
繪ゑ子こ似にたるうらや（まむし）よの月つき  
右正保みぎせいほのころれ吟ぎんあるより、とり、されどこのへいハいやくとてよ

離屋りやう  
立圃たつぼ

耳みみのうらふかんとや、そのせゑハ青蓮院しよれんゐん子こ（まむし）よ入道しよだうの四百  
年ねん以前の物ものあり、その筆者ひつしや志しまへ惜おぼアと遠碧軒えんしやくけん隨筆ずいひつ子こ  
をえう、まゝある筆記ひつぎ子こ葉室大納言はむつだいなごん自畫じが自賛じさんのうらとて、  
世よ世よ中ちゆうをうくハ

（まむし）よ入道しよだう

あまきハあゝあゝ

あけアやそのらん

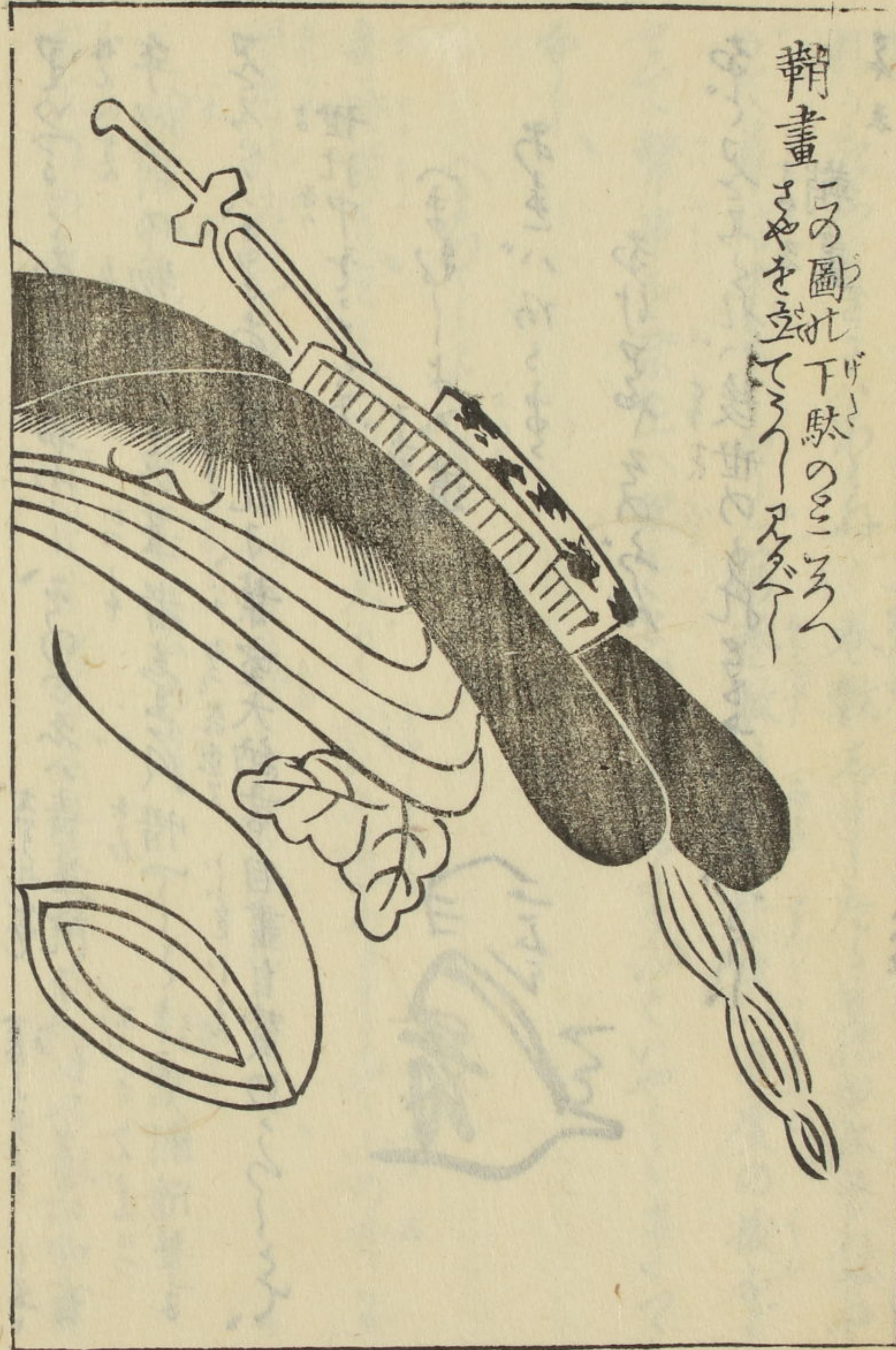
あどいゑるれハ後世こうせのめれとまきとせんがくハ

鞆畫たもとゑ

鞆畫たもとゑこのふりのむしとやうとてのあれと今いまハさうとありとて







鞘畫  
この圖に下駄のこしらへ  
を並べて置くべきなり

らぬ人もあり、よりて左ふその圖説をあそを載す、



執苑日涉、池北偶談曰、西洋所製玻璃等器、多奇  
乃曾見其所畫人物、視之初不辨、頭目手足、以鏡照  
之、卽眉目宛然、姣好鏡鏡、而長如卓筆之形、云熙按  
今西洋畫有初不辨何狀、以光髮刀鞘照之、卽人物  
鳥獸宛然、如生者、俗謂之鞘畫、此王士禛所謂以鏡  
照之者也、と云々、

古池の句

嵐亭俳話、芭蕉の古池やうらら飛こむ水のおとこいふ  
句ハ、吳融が廢宅詩、放生池涸蛙争聚といふより案を  
りあられしもある、此落句、不獨凄凉眼前事、咸陽

一火便成原と作り、燒あとの深川子あまひ住しころの  
吟あまを此感あり、くをさおりのくれりとさるはさあらん  
くおりのくおりのれり、

琴唄志るま弓の考

志るま弓のおもひ、此をくまきハ、そらふで八十の翁、戀し腰を  
そらふのそらふの琴の唱歌を、むりより人さか志賀寺の上人、  
京極の御息所を、とそめて戀を、いととつらうまうけい  
こら、れま、お、あ、上、人、は、故、事、は、弓、は、あ、り、た、る、と、う、ら、  
あ、り、わ、り、琴、唄、ハ、一、節、は、中、は、こ、れ、か、れ、と、う、あ、を、そ、ま、う、と、し、た、  
昔、趣、あ、ま、と、多、く、れ、ハ、お、り、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、  
ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、



たゞ義經記ぎけいぎに實方中將さねかちゆうしやうのあざむけ野邊のべのあまゆきや  
ちうすひまきやふゆふ、あまぬやど、何とぞせんあれての後のち  
はそとぞくや、きとあま、ルン、おと、の野邊のべをえて過すり  
とあり、この詞ことばををねるあづ、よと、に實方さねかの故事ことば、後拾遺ごしゆい  
和歌集わかむに、さらひそぐり、ゆ人のゆと、子、あちの國くにより、弓ゆみとつ  
くを、とて、あま、さぐり、ル、藤原實方朝臣ふじわらのさねかちのわらじ、  
よの、の、これ、あ、ち、の、ま、弓ゆみ、き、よ、よ、さ、や、ひ、た、め、さ、と、つ、ら、さ、め

とあり、次子八十の翁おきなが戀小腰ここしをさす、つとふ、志賀寺しげでらの上  
人のことをあやめりて作意さくいせ、力のとぞ、や、と、も、再按さいあんすり  
小貞徳こさだのり、淀河小琴よどがわこことの唱歌うたが、あま、夏なつの日ひと、の、句く、け、自註じぢゆ

小琴こことの志こころやうり子こが、ごせんごせんの地藏ぢぢぢ、う、こ、の、腰こしと、さ、さ、の、つ、と、ふ  
と、あ、り、と、の、あ、ま、と、さ、さ、さ、う、れ、は、む、り、琴ことの唄うた子こら、れ、は、あ、あ  
り、と、今いまの組歌くみうたを、つ、ら、う、つ、ら、物語ものがたりの、詞ことば、ま、り、合あせ、つ、く  
ま、ま、の、あ、づ、と、や、り、ま、る、

くらごせんくらごせんの地藏ぢぢぢ

くらごせんくらごせんの地藏ぢぢぢと、あ、ま、と、その、あ、ま、は、と、う、さ、ま、い、ひ、さ、と、い、え  
たり、東海道とうかいどう名所記なしょきに、け、地藏ぢぢぢの、と、を、い、ひ、地藏ぢぢぢ、す、り  
神通じんどうを、う、あ、い、ひ、を、ま、き、ら、れ、て、くらごせんくらごせん、ご、り、ハ、の、こ、り、たま  
ふ、と、あ、り、くらごせんくらごせんハ、佉羅陀山たらださんと、う、ま、て、地藏菩薩ぢぢぢぼさつの、浄土じやうど  
あり、延命地藏經えんめいぢぢぢぎやう、地藏十輪經ぢぢぢじゆりんぎやう等らうに、見、え、り、慧琳音義えいりんおんぎに、佉



羅帝耶山梵語山名也或譯為驪林山十寶山之一山也

雷公連鼓を肩の圖

雷公を畫く小連鼓を肩のりるを圖すはと王充論衡に  
又云く世人の多きところあり、あるは觀世主菩薩の眷  
屬に風伯雷公あり金剛阿吒婆俱經に雷の連鼓を肩へると  
と云えり、圖像抄中にも亦連鼓を肩の圖あり、ありは論衡  
に俗説と云ふなり佛説にありとあるをあると云ふ、さう、連  
鼓を肩へる圖は法華經の普門品に雲雷鼓掣電の文あり  
てその聲は響を形容したるものとあり、さう、ありは、

佛家にも猶ありき意もあぶく、再抄に古遺文に古篆に

雷字と云ふの如く作何と云く連鼓のうらふあり

おとをその窮理説に、氣海觀瀾に夫雷鳴即越列吉的

爾之迸炸而與礫聲同其音與雲反響斯聞殷云の理

子於て間然と云く因云佩文齋詠物詩選に山上に雷を聞の

詩あり宋蘇軾云唐道人言天目山上俯視雷而每大雷電

但聞雷中如嬰兒聲と云く願豐堂漫書に夏日晦菴與客登

顧見山下白霧彌漫若大海然而山頂赤日了無纖翳

俯視突烟暴起或文餘瀝至尺許亦無所聞頗異之

後者以為雨作也及下山村麓人云適有驟雨挾震



雷數百已過矣、向所見烟中突起者悉雷也、凡聲自  
下聞之則震、自上聞之則否、所謂山頭只作嬰兒啼  
者是已、と云々、富士山をめぐり、諸高山いづれも此趣に異  
なるを、れ、文章の妙も、その見聞のするを、ろく得る、と  
云々、

守宮の辨

ありや、り、二蟲名實を、あ、人問、る、も、ろ、ろ、云、昔、より、守  
宮を、あり、り、子、克、ま、て、的、當、あ、る、漢、書、顔、師、古、註、子、守、宮、蟲  
名、也、術、家、云、以、器、養、之、食、以、丹、砂、滿、七、斤、擣、治、萬、疔、  
以、點、女、人、體、終、身、不、滅、若、有、房、中、之、事、即、滅、矣、言、可、

以防閑淫逸故謂守宮也、とあり、ふ、れ、ハ、今、の、や、り、子、克、  
了、その、證、ハ、守、宮、一、名、壁、宮、ま、壁、虎、蝎、虎、蠅、蚘、さ、り、陶  
弘、景、云、蠅、蚘、喜、綠、籬、壁、間、以、朱、飼、之、滿、三、斤、殺、乾、赤  
以、塗、女、人、身、有、交、接、事、便、脫、不、爾、如、赤、誌、故、名、守、宮、  
とあり、この、喜、綠、籬、壁、間、とあり、ま、て、あり、り、子、ハ、あ、る、今、  
や、り、あ、る、と、辨、を、待、た、し、あ、る、と、や、り、と、い、ふ、名、ハ、守、宮、  
此、字、ハ、あ、り、て、や、り、の、畧、語、と、も、あ、り、と、さ、し、ハ、あ、る、家、を  
や、り、と、常、あ、れ、バ、家、子、住、よ、り、あ、る、家、守、の、義、あ、る、り、  
ハ、漢、名、あ、る、ハ、守、宮、子、あ、る、れ、と、誤、れ、り、近、來、物、産、家、子、龍、盤、魚、  
子、克、と、物、理、小、識、云、龍、盤、山、乳、洞、有、金、沙、龍、盤、魚、皆、四



足脩尾丹腹状如守宮といふ事もある、その名を實とあれ  
 ばやいあやをささず、ありといふ訓ハ井守の義あり、井住  
 の意あり、井とハ田子漑流をいふ今も用水あり、常子溝と  
 渠もいふで田子あり、さうして井とハさう、その流をせむ  
 井堰といひ、井子ろを井杭といふ田舎をみる事といふも田井  
 子住よりいふくさ井より肩つた名あり、今ハ堀ル井のこ人れ  
 目あまこれハ用水を井といふをめぐり、サあれど、井字ハ  
 わと井田より出たる象形あり、書紀ある神代卷の天真名井  
 をいふ、萬葉集のあさう山影さくぬら山の井ともいひ、ま  
 落たきろをいふ井れ水あり、あつたよりいふたつたなどあつて

もあつた

木乃伊

ミイラといふ蠻薬一名蛮人ともいふ、この薬名人口子膾炙  
 て諺にもいふ採のさうあつたといふ事あり、ミイラハ木乃伊  
 と書り、輟耕録に云へり、綱目にも本より、云れども實ハその  
 性のあつたれぬり此故にさういふの説あり、插林雜話に、木  
 乃伊本名ミエウミヤアといふ、ハナリヤハルミヤをいふ、出づ、これ  
 ハハル井モといふ薬を人の尸に腹の内子つめあつたときハ何年を  
 磨てもその容打腐すといれ、先祖の形容をおがく存せん  
 とす、ゆのハゆくの如く、そ箱子入てそれ尸を貯てまを多







りの漢韃爾干といふ獸ハ北海の狄地てきちの住す免えんとぞさ  
 る獸の角つ北上野國の山中まなちやう子こあえと疑うたがあきふあゝんら  
 話ハ六をむりの先さ幸手宿まうて子こ遊あそびころまきたる事あり  
 さて過すぎころ不忍辨天あのみん北境内けいだいやくひんをい  
 山やまふて井戸いどを堀ほりころまひころの奇石きせきをり出いころとく  
 携たづへきたる人ひとあり予よも手てまとりておのあころあころい  
 子こ枯骨こころとハ足あしゆるりのその品しなあとも辨わかづらんその席せき子  
 てある人の象齒ざうしあんととど青山あせやまあころありさるれを  
 堀出ほりだへくも何なにふぬバそれをも定さだめろ過すたりころその後のち一  
 友人とものころハ西洋人さいやうじんの長崎ながさきより江戸えどへ来る路みちのむとあて播は

磨まの海濱うみべふくつきをひく人ひと北きた奇めづき石いしを拾得ひろひてり西さい  
 洋人やうじん子こハ何なにといふ石いしを問とり子こころこれつらくハせてその石いし  
 ハりれ子こあえよとあきり小乞ここてやまされバさる石いしを贈おくりあ  
 すむとに性質せいしやうをつまひころ子こ辨わかづきたまされころ  
 々約やしてあえぬと子こ西洋人さいやうじんのいふやうこれハ象齒ざうしあり  
 あつれと世子せうじハつらく北國きたくにも象ぞうも犀せいも住すみれと風土ふうどの變へん  
 化くわ子こありて今いまハあき地ちもあるれり世界せかい子こハ今いまあつとて上古じやうこ  
 あり決けつしてあつとハいひぐさきとあり此地このちも象ぞうのまろこ  
 小ハこそ象齒ざうしハあつたりころたれを引ひてころと盡つても  
 のころぬとそこま子こありて替人かひハ上野國じやうのくにの獸角じやくかく青山あせやま北象きたぞう



齒も疑うたがままああるるべべりりととありありああららどど天地あめつち此こゝ間ま小こ生せいとといいははるる  
禽とり獸けもの亦また北きたハハ異い國こく子このの限かぎててすすめめるるももののまま定さだめめりり吾われ邦くにのの  
上かみ古こハハ住すまんんももををりり知しべべくく夏なつ蟲むしのの氷こおりをを疑うたがももととりり  
ままふふああるる近ちかきき子こ居いてて遠とほをを識し今いま子こ處よしてして古ことと知しハハ惟ただ力ちからのの學まな  
此こゝちちくく子こととああれれとと古こ人ひとののいいひひええハハ確まこと言ことばありありすすやや

天復の古鐘

過すまし文化十二年の春西遊せし豊前國幸佐八幡宮少すく、  
古鐘こかねを見みええるるそそハハ御ご供く所しよとといいふふととりり此こゝ軒のき小こけけくくつつねね子こ用もち  
りり半はん鐘かねありありそそのの製せいハハままくく尾お上のうへのの鐘かね遠とほのの太たい平へい鐘かねとと同おなじじくく  
たたららととちち小せああるるのの銘めい識しああれれどど左さ文ぶん子こててここ漫まん滅めつてて讀よみみへへ

ううららとと之これもも天復四年甲子とありし即一本を擲して  
歸かへりり按あずず天復ハ唐比昭宗の年號にて我延喜四年子あり  
むむりり實じつ小こ希き世せいのの古こ物ぶつありありてて珍ちん重じゆうすすききりりののありあり遠とほ境きま僻へき地ち  
ハハ好この古このの者ものももいいままとと搜さう得とくささるるもも往むかひひおおきき子こああるる狩うりり谷や掖えき齋さいハ  
朝鮮鐘ありとあり、

天復四年甲子二月廿日跡山林  
大寺川河川文藝本院上跡本林主  
蓮華一合入金子五十人の影







墓版を掘りて千餘年を経て野人のため子堀ふところと  
いふも墓誌あればこそいふべしこれぞとて掘られしは  
貴人の葬埋にあらざるは墓誌あるべきといふれあきまあるは唐  
土あり明の萬曆のころめ邵陽縣北舊城より曹全碑をあり  
出さるるとおきし抄ひきやく土中より金石を掘りてと多  
といふもかく古代の徴とありのいやく希なるん

銅鐸

今もたましく子ハ堀つるものあり阿育王の寶鐸といふ銅器ありそ  
の事れは元々扶桑畧記に天智天皇七年正月十七  
日於近江國志賀郡建崇福寺始令平地堀出奇異

寶鐸一口高五尺五寸まゝ續日本紀に和銅六年  
七月丁卯大和國宇太郡あり堀りて三代寶錄に貞  
觀二年八月辛卯三河國渥美郡村松山中少堀り  
獲たりといふを近くも三河國御油の驛より堀出たるを  
鹽尻子載寛政四年三河國谷口村あり堀りてと閑田  
耕筆子記に文政八年伊勢國壹志郡下川口村の東風  
呂谷あり堀出ると聞ク予も一口を蔵弄せりされと  
みて目撃するもの中少くハ寫山樓の蔵品ありとも奇絶と  
す猶諸家子蔵すこと少くは其の圖説の考證したる  
書もあれど石山寺縁起の繪に寶鐸を堀出たる圖を載さ



色ハこそ小 摹出す、



高島千春男  
千秋摹



右の繪えは、そのまの上うへ古ふるよりより堀ほり出いるところの銅鐸どうどくと形かたち状じやうとなり、  
其そののま畫えは、其そののま真物まことをま見みたことによりて、其そののま名なをなよりて、其そののま名なをなよりて、  
其そののま形かたちのまのま堀ほりとなりやなり、

七福神

七福神しちふくじんとは、其そののま狩野家かののけのま七福神しちふくじん遊戯ゆうぎのま圖ずをま繪えしたりし、今いまハ世人よじんのまあまねくあまねく繪えておもてあそべることとすべしき、  
其そののま時とき寫山しやせん樓ろうのま七福神しちふくじんのま圖ずハ、其そののま狩野松榮かののしょうえい此こゝにま繪えしたりし、  
其そののま先生せんせいのま七神しちじんハ、其そののま同どう異いあり、摩訶阿羅耶まかあらかやのま七福神しちふくじん傳でんハ、其そののま辨才天べんさいてんとし吉祥天きしやうてんとし、  
其そののま壽老人じゆらうじんハ、其そののま書言字考しよげんじかう子こハ、其そののま吉祥天きしやうてんとし壽老人じゆらうじんとし、  
其そののま吉きち祥しやう天てん存ぞん在ざいハ、其そののま壽老人じゆらうじんをま省しやうし、其そののま壽老人じゆらうじんハ、  
其そののま壽老人じゆらうじんとし福祿壽ふくろくじゆハ、其そののま同どう一いつ老人らうじん星せいあり、其そののま壽老人じゆらうじんハ、其そののま壽老人じゆらうじんとし、  
其そののま壽老人じゆらうじんハ、其そののま壽老人じゆらうじんとし、其そののま壽老人じゆらうじんハ、其そののま壽老人じゆらうじんとし、



富貴の身とあるまんとあるあり福神の中へ入るなりとや  
 かく福の神といふ大黒天の事をいふそのひらりとて  
 能言此福の神も大黒天ありとて七福といふ數仁王  
 經の文も七難即成七福即生とあるまよふあり猶考  
 證此のりきハ延譽雜記より  
 庚申 心猿 西遊記  
 庚申塚とて見ざる聞ゆる言ざるの三猿を石り彫たるを道  
 の傍に立ちたりその獼猴れとて天台大師の三大部の  
 中止觀の空假中此三諦を不見不聽不言小比したまふ  
 とありそれを猿と表して傳教大師三の猿に刻たまふ

とやハ傳教大師の作の猿にありけり今の粟田口の  
 ハ新まりのありと遠碧軒隨筆に見えぬとあるれも山州  
 名跡志ハ金藏寺に俗にお猿堂といふ子ある三猿の像傳  
 教大師の作といふ也他野に安置す也ありて此とて  
 小移せりといふかれハ此金藏寺ある三猿ハ傳教大師の作と  
 見えたり又あるハ慈惠大師山王七猿の和歌にゆづきて  
 三猿をつくり庚申子傳會やハあるぬやといふ  
 つづくとうき世の中をかりつハまゝのつづきありぬ  
 見えたりハいそごもかばざるのどうきよの中子まゝのけりひた  
 つれもかくいとまゝとてまゝなる所定かき世を夢とていふ



何ども思はれはるるげ小むぐうや又さるるまきさるるとハあづか  
 まけはるるそのそくもおかれ腹もたてきさるるそりまきさるるありき  
 心ハあまされ正をせりあとも人れあき銭いさるるそり  
 見ず聴す言さるる三の猿ありも思さるるまあるありけき  
 一の七猿の歌小ありつくりまきけりとのあもことりありあきさるる  
 らんといふ未如の一首ハそのあき三猿をよきさるるせりあき傳教大  
 師の三猿此像慈惠大師の七猿此詠をといづれも心猿子意  
 を寓したるものハあきぬる古言少も心猿子意ををさるるこ  
 ろあれ心少あき心猿子意をさるる心猿子意を野猿の逸躁  
 比喻するといふあり心地觀經ハ心如猿猴遊五欲樹不

暫住とあり西遊記の一書も亦心猿をむねとて玄奘三藏の  
 西域子行るる名を西域記慈恩傳をとりあつきてつくり  
 話説とをせりつくりは縁をせりあき慈恩傳子唯於  
 四禪九定未暇安心今願託慮禪門澄心定水制情  
 援之逸躁繫意馬之奔馳といふ文もありこれ西遊記の  
 縁起とをせりつくりとつくりあきつくり五雜組ハ西遊  
 記曼衍虚誕而其縱横變化以猿為心之神以猪為  
 意之馳其始之放縱上天下地莫能禁制而歸於緊  
 菴一兎能使心猿馴伏至死靡他盖亦求放心之喻  
 非浪作也といふ至當の論ハ具眼小説をよきといふ



ア、

行基菩薩の遺誠

砂石集子行基菩薩の遺誠の文を載て云世々々々々  
望あるふ似る俗子をむけハ狂人れど一あかす世の中とわ  
ま實小格言けりとるそり又同日の談子ハあな風來山  
人が放屁論子世間のため子骨ををれハ世上で山師とそり  
まども鼠とも猫ハ爪ををる我よりおそく人物らさま  
面をやつらつ山師ハいそもあつ人の藝をりつて山の足  
代り我ハ山不似たるをりて藝ハ助と成とつてもま々慄  
慨の意あきまもあつたをりて既太史公も天道ハ是耶非

耶とのひたれハ古より心あらん者ハ何れハ子こそ詞あつた  
世のあつたをハの切子う切りあらん古歌ハ

命待あつたはう憂とあつた皆をる古  
天保十一年三月山崎美成三養居北南軒

三養雜記卷四大尾



北峰先生著述目錄

涉史臆斷十卷

六史三鏡ハ、野史家乘マデノ事實ヲ商確シ、  
サニ史割記唐史論斷ニ比ス、史學必讀ノ書ナリ、

讀四刑書管見六卷

唐ノ世ニ律令格式ヲ四刑書ト云ニヨリテ、  
ノ中古今未ダ解シガタキ事ノ發明不レ、事正ヲ記ス

文教温故 二卷

軍防知新 二卷

先生常ニイフ、文事ハ古ヲ尚ビ、武技ハ新ニ從フ、  
シトテ、温故知新ノ字ヲワケテ名  
ヅクラレタリ、古今ニ通シ文武ヲ兼タル  
學カコノ二書ニテ知ベシ、

歲時要畧 四卷

好問質疑 四卷

廷響雜記 六卷

撩天閑話 二卷

耽竒漫錄 二十卷

駝 薈 三卷

猜 彙 二卷

提醒紀談 二卷

海 錄

隨掃篇

文教温故

二卷 既刻

皇朝古昔ハ、經傳律令ノ學、  
ノ沿革、默圖角筆ノ圖、文字ハ平カ  
片カナ和字ノ說、文章ハ渾文和文俗  
文ノ考、且詩歌ノ紀原、整版活字ノ  
ハ、  
天詳ニ考證アリテ、初學ニ有益ノ好書ナリ、

三養雜記

四卷 既刻

世事百談

四卷 近刻

此書ハ先生世ニ聞エタル博識ヲモテ、  
年来ノ見聞ニ任テ、雨ノツルク夜ノ  
スサミ、  
怪談、奇說、音曲、遊戯、人情、世態、  
ハ、  
イ、  
ダ、  
人、  
ノ、  
氣、  
ノ、  
ツ、  
カ、  
ガ、  
ル、  
一、  
口、  
話、  
ヲ、  
記、  
サ、  
レ、  
タ、  
ハ、  
或、  
ハ、  
驚、  
ク、  
タ、  
又、  
ハ、  
笑、  
フ、  
ク、  
春、  
ノ、  
月、  
ノ、  
眠、  
ヲ、  
サ、  
シ、  
秋、  
ノ、  
夜、  
ノ、  
寐、  
覺、  
ヲ、  
モ、  
慰、  
ル、  
オ、  
モ、  
シ、  
ロ、  
ト、  
隨、  
筆、  
ナ、  
リ、

猶、  
外、  
琉、  
球、  
入、  
貢、  
紀、  
畧、  
藥、  
銘、  
考、  
證、  
ホ、  
雜、  
著、  
數、  
部、  
校、  
正、  
ノ、  
書、  
モ、  
亦、  
少、  
カラ、  
ズ、

明治廿三年寅五月讓受

愛知書肆

梶田勘助

愛知縣名古屋市  
鉄炮町廿三番戸



